

修士論文（要旨）
2020年1月

青年期における心理的居場所感と
心理的ウェルビーイング・自我同一性・抑うつとの関連について

指導 山口 一 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
217J4007
菅原 奈美

Master's Thesis
January 2020

The Relationship between Sense of Psychological 'Ibasha' and Psychological Well-being,
Ego Identity and Depression in Adolescence

Nami Sugawara
217J4007
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目次

第1章 問題提起	1
1.1 青年期について	
1.1.1 青年期の対人関係	1
1.1.2 青年期と自我同一性	2
1.1.3 青年期と抑うつ	3
1.2 居場所について	
1.2.1 心理的居場所感の定義	3
1.2.2 心理的居場所感尺度と構成要素	4
1.3 主観的幸福感について	
1.3.1 主観的幸福感の定義	5
1.3.2 青年期と主観的幸福感	6
第2章 研究の目的と予想される結果	7
第3章 研究方法と手順	
3.1 調査対象者	8
3.2 調査時期	8
3.3 調査方法	8
3.4 質問紙の構成	8
3.5 倫理的配慮	9
3.6 分析方法	9
第4章 結果	
4.1 基礎統計量	9
4.2 男女別にみた各居場所に対する心理的居場所感の高さ	11
4.3 男女別の各居場所の4因子と3つの居場所の関連	12
4.4 男女別の各居場所に対する心理的居場所感と自我同一性・心理的ウェルビーイング・抑うつとの相関	14
第5章 考察	
5.1 仮説1について	17
5.2 仮説2について	18
5.3 仮説3について	19
5.4 仮説4について	19
5.5 仮説5について	19
5.6 総合考察	21
引用文献	
資料	

第1章 問題提起

近年、少子高齢化に伴い、核家族や独居世帯が増え続けており、様々な年代において「居場所づくり」が注目されている。なかでも教育現場において、いじめや不登校、引きこもりにより居場所がないと感じる学生が年々増加しており、そのような学生を対象にしたフリースクールや学生相談室など、思春期・青年期に様々な居場所を増やす試みがなされている。

そうしたなか、則定（2008）は居場所についての心理的な面に着目し、「心の拠りどころとなる関係性、および、安心感があり、ありのままの自分を受容される場」を心理的居場所とし、心理的居場所があるという感情を心理的居場所感と定義した。この心理的居場所について石本（2010）は、他者との関係性を育むような居場所である社会的居場所が、精神的健康に促進的な影響を与えていると述べている。また矢野（2018）は、女子大学生の居場所に関する研究を行い、主観的幸福感を高めるためには、それぞれの居場所でありのままにいられる感覚を得られるような関係を築くことが必要であると明らかにした。

よって自我同一性を確立する時期である青年期において、心理的居場所感が存在することは重要な要素であり、また心理的居場所感が感じられることは主観的幸福感に影響するのではないかと考えられる。

第2章 研究の目的と予想される結果

先行研究より、青年期において、心理的居場所感が存在することは重要な要素であり、また心理的居場所感とは主観的幸福感のみならず、自我同一性、抑うつと深い関係があるのではないかと考えられる。また、青年期は家族より、学内外の友人・知人との関係性が育まれ、そうした場がより心理的居場所感に繋がるのではないかと考える。よって、本研究では今まで明らかにならなかった学内外の友人・知人に関する居場所感について着目し、「家族/学内の友人・知人/学外の友人・知人」の3つの心理的居場所感について調査を行った。これらに着目することで、青年期の心理的居場所感の重要性や、家族や学内の友人・知人のみならず、学外の友人・知人との関係性が心の豊かさに繋がるということが明らかとなれば、学内外での居場所作りの取り組みにおいて新たな知見として提供できるのではないかと考える。

第3章 研究方法と手順

本研究では、関東の大学に在籍する大学生男女 968 名を対象とし、質問紙調査を行った。

質問紙は、表紙と年齢、性別、学年を尋ねる項目に加えて、則定（2007）が作成した「心理的居場所感尺度（20項目×3つの居場所感）」と谷（2001）が作成した「多次元自我同一性尺度（20項目）」、島・鹿野・北村・浅井（1985）が作成した「日本語版 Center for Epidemiologic Studies for Depression Scale (CES-D)（20項目）」、岩野・新川・青木・門田・堀内・坂野（2015）が作成した「心理的ウェルビーイング尺度短縮版（24項目）」の4つの尺度から構成されている。

得られたデータは、統計分析ソフト IBM SPSS Statistics 25 を用いて分析した。まず、フェイスシートの内容をクロス集計表にまとめて基礎統計量を算出し、性別、学年、各尺度の因子ごとに平均値と標準偏差を算出した。仮説1は、男女別で心理的居場所感の高さ

を検証するため、*t*検定を行った。仮説2は、3つの心理的居場所感の高さについて男女別で検証するにあたって、一要因分散分析を行った。仮説3と4は、各尺度因子間の相関を検証するために、男女別で相関分析を行った。

また本研究は、桜美林大学研究倫理委員会の承認後(2019年3月承認:受付番号18033)、2019年5月～7月に調査を実施した。

第4章 結果および考察

回収した質問紙は479部(回収率49.4%)であり、そのうち未回答のものと記入漏れがあるもの、および質問紙の全ての項目において同じ数字を選択しており回答が歪曲されていると考えられるものなどを除いた234部(有効回答率48.8%)を分析対象とした。その内訳は、男性86名、女性148名、平均年齢は全体で19.8歳($SD=1.30$)であった。

本研究において、青年期に心理的居場所感が自我同一性と心理的ウェルビーイング、抑うつとどのように関連しているのか、また3つの心理的居場所感について着目し、検証を行った結果、男女で異なる知見が得られた。具体的には、家族の心理的居場所感は男性よりも女性の方が高いことが明らかになった。また、男性は3つの居場所について、「学外」>「家族」>「学内」の順で心理的居場所感が高く、女性は「家族」≒「学外」>「学内」の順で心理的居場所感が高いことが示された。

心理的居場所感と自我同一性、心理的ウェルビーイング、自我同一性、抑うつとの関連について、仮説通りの結果には至らなかったが、性差がみられたことや、各々で心理的居場所感を形成するのではなく、様々な心理的居場所感が個人の中で存在することが自我同一性、心理的ウェルビーイング、抑うつとの関連に繋がっていることが明らかになった。具体的には、男性は3つの居場所感の中で、自我同一性と心理的ウェルビーイングが最も相関が高かったのは、「家族」であった。それに対し、女性は「学内」が最も相関が高かった。「抑うつ」については、男性は「家族」が最も相関が高く、続いて「学外」、「学内」であった。女性は、「学内」が最も相関が高く、続いて「家族」、「学外」であった。このような結果がみられたことは、本研究において新たな知見と言える。男女で異なる結果が得られたこととして、青年期の対人関係は男女で異なる関係性を求める(榎本, 1999)ことから、本研究の相関においてもそうした要因から考えられる結果になったのではないかと考える。しかし、このような結果になった要因は今後も更に深めていく必要があると考える。

また、青年期の心理的居場所感は男女ともに学内の友人・知人よりも、学外の友人・知人において心理的居場所感を感じやすいことから、更に学外の心理的居場所感の取り組みを高めることや、学内の心理的居場所感の不足を補うために大学内での居場所作りの取り組み等を行うことが今後の臨床の場で活かされるべきであろう。

最後に、本研究の問題点および課題は以下の4点が挙げられる。

第1に、本研究の質問紙調査において質問項目が多かったため、回収率が少なく、また回収時に同じ項目に記載している回答が多く、有効回答率も低い結果となり、サンプル数の偏り等みられた。そのため、今後は多くの青年期の人たちに回答を求めてもらうべく、質問紙の項目数の検討や使用する尺度についても再度検討する必要があると考える。

第2に、本研究では青年期の心理的居場所感と自我同一性、心理的ウェルビーイング、抑うつとの関連について一定の知見は提供できたものの、青年期における横断的な研究に過ぎないため、発達による時系列的な変化については言及できない。そのため、今後は縦断研究やコホート研究によって、生涯発達の観点から検討する必要があると考える。

第3に、本研究は心理的居場所感と自我同一性、心理的ウェルビーイング、抑うつが互いに関連し合う他の要因を含めた包括的なモデル化を行っていないため、他の要因も含めた包括的な検討を行うことで、他の要因との相互作用についての知見が得られるのではないかと考える。

第4に、本研究の調査を行った大学が1校に過ぎず、結果に偏りがみられる可能性が考えられる。そのため、今後は様々な大学を対象にし、調査を行うことや、大学に通う青年期と社会人を対象にした青年期など広範囲で青年期の心理的居場所感の調査を行うことで様々な知見を提供できるのではないかと考える。

引用文献

- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47(2), 180-190.
- 石本雄真 (2010). こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所 カウンセリング研究, 43(1), 72-78.
- 岩野卓・新川広樹・青木俊太郎・門田竜乃輔・堀内聡・坂野雄二 (2015). 心理的ウェルビーイング尺度短縮版の開発 行動科学, 54(1), 9-21.
- 則定百合子 (2007). 青年版心理的居場所感尺度の作成 日本教育心理学会総会発表論文集, 49, 337.
- 則定百合子 (2008). 青年期における心理的居場所感の発達的变化 カウンセリング研究, 41, 64-72.
- 島悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, 27, 717-723.
- 谷冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 矢野加奈 (2018). 女子大学生の対人関係ごとの居場所感について—主観的幸福感との関連から— 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集, 18, 13-24.